



畫本西遊全傳

三編

八



〜遠21
2500
40-28



門へ遠く
號 2500
40-28

繪本・西遊記三編卷之八

岳亭丘山譯

池

行者假名降怪狐

觀音現像伏妖王

期て行者の壁の上の住り居て是等の言を聞けり又輕々と飛
で後宮の到り金聖皇后の髪の一ふしり動靜を伺ひ居りし此
時金聖の行者が仕掛くと生死も知れ成り言を聞てたふ馬き紫
の上の打伏て朱紫国の方を拜し候を流し君王自妻を救ん為
神僧の命を遣はるる然れども神僧言を誤りて死生も知れ更
ふ又妖怪の悟とる此言を恨とて以上の艱難計りぞに念主
本国の帰りを言鳳凰を奪ふを全する言を得て王を拜して
驚きりし行者見ると向て自王右敷きり言をいれ我まて死に唯我
性急する生をめて生見ると奪てより心の裡に忍びなく是を聞見

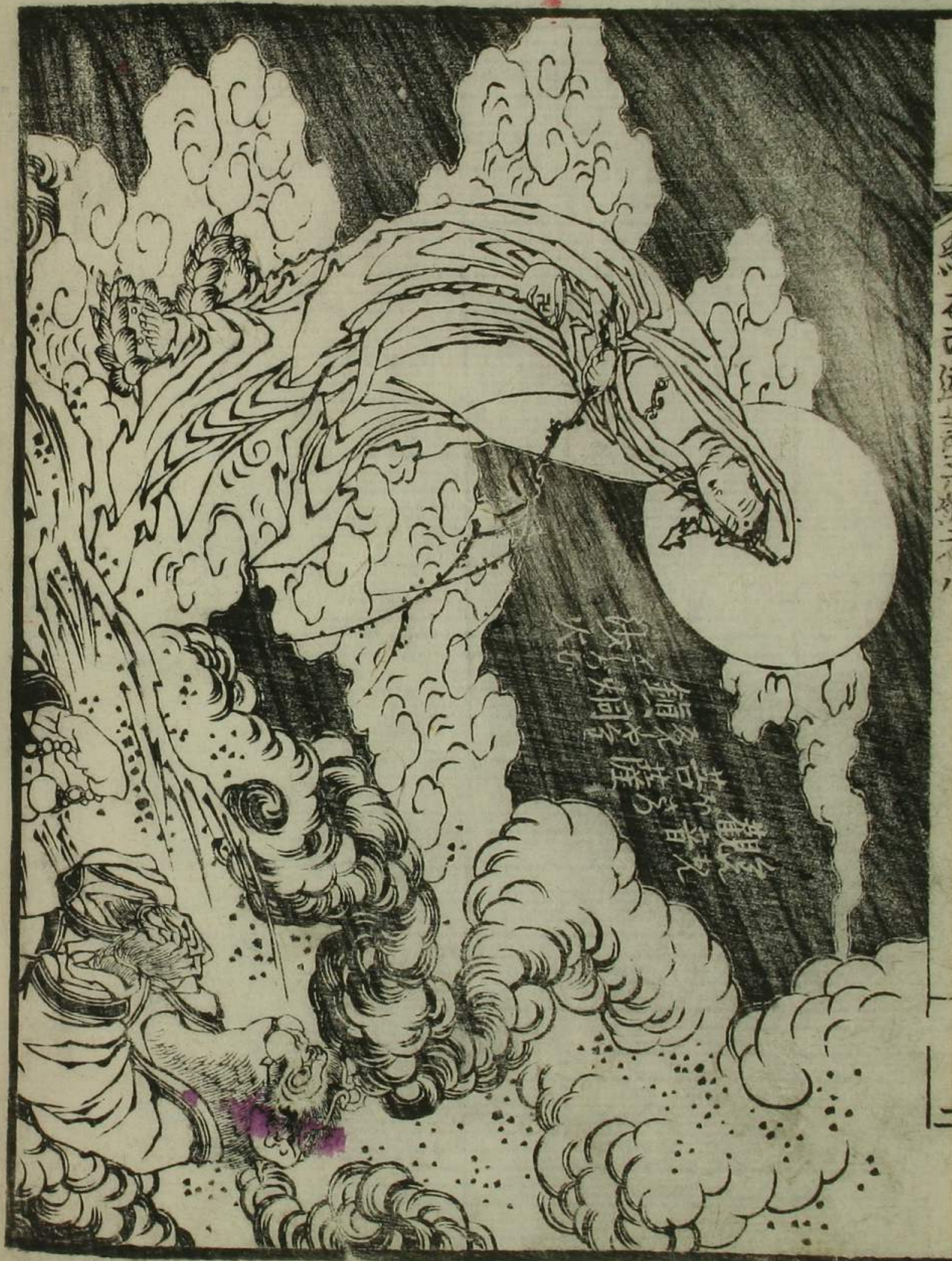


繪本西遊記三編卷之八

小計むも烟火起つて終ふ事を仕損ぐ所の白王后今一度渠を
欺き連まの酒を肴めて睡りゆ我又別謀計を廻し宝目の事を
ひ取ん金聖鷲驚き怖む神僧你那死ふ在て斯の如く説話するや
行者笑て我你的髪の上小蒼蠅見とつて住しる白王后早く身
近きとる影と一人呼出し一人甘女お変ふと女怪を欺くべし白王后
あやしく疑ゆと雖も渠が言ふ任せ一人の侍婢を呼出して其名を
春嬌ととり是玉面狐の女精なり召ふ應ふと白王后の前お出て跪
下娘々今何幹有て召しや金聖が曰く我今大王を請ふと
安寐進せんと思ふる春嬌心得七八人の小女的を呼出して那
由兎鹿の女精なり手手小灯光を兼て出する行者白王后小教て
立上りて一根の毫毛を扱て睡虫と変ふさせ春嬌が面お放す

此を以て妖怪忽ち睡くより一違お倒して臥する小を行者の甘女散と物陰
小押込おれ自己春嬌が安小室へ許すの小女的を引列大王の前お
至り金聖娘々大王を迎奉らんとて爰まで来たると人の小女王前て
出向ひて白王后の曰く當今の烟火の消て偷人も逃しと聞ゆと
王を迎て安寐進せと御迎み奉りて女王満心惟喜て白王后珍重
する彼泣血人の孫悟空なり我部下有来去を殺し夫も変化し来りて宝
貝を奪取んと為し此幸ひ小早く目ん咎め宝目の取返しとつ然りと
斷りしお尋せども跡方も見え此故おまご安心する爰能く白王后聞
悟空の神通ありと聞が得逃し去るものなり大王放心思の吉と止
後宮お入て安寐の人女王白王后の懇心お迎るを見て固く尋るお及
小女的お付て你小堅く要心せよと終ふ白王后と打連て後宮お来

白王后の御前



けしむの白王后延宴を設て大王の進る行者の假の春嬌と成て酔を把
て大王の酒を強て酔む白王后の専ら説的星夫妻語をうけ口言
酒を勸むを妓王骨軟筋麻て口言白王后の身を任せざるまのそ恨恨
り白王后大王の向ひ御程の寶貝の曾て損ぐ失ざるや今の邪短小置
多ひを大王の聞て彼寶貝の天地間闕以前より鑄りたる短の物るを
を奈何を損るま有ん我今腰の帯もたる行者一追ふ在て間由敢
て手を延て一掴の真毛をぬきまんとて数手の虱とて大王の身ゆ放ち
たは衣帯の透間より潜り入浪乱れ総身を咬ひたり妓王痒きま
堪ぐて手を懐み入て痒き處を探り手ゆ任せと捻り出で燈光の下
めて是を見を則ち数十の虱あり白王后大て大王の襯衣思ふ久く懐洗
くぬり此虱を生ぜりまん妓王大の小懸愧て我從來此虫生じたる

まを計りも今宵醜を出しころ白王后笑て曰く大王何ぞ目をと懐
とくめや常言の白王后身上三個御虱有と左右且脱る自ら
を脱捨て赤裸のまるとき時腰の帯も金鈴の袂色ゆ虱を去り
居ころ春嬌一追ふ在て是を見て大王金鈴の上の虱多きと計りか
く我是を取捨進せんといぬ妓王心生眞春嬌のまを知らんま
金鈴を解て春嬌の迎與行者是を受取て態と静み虱を去るぬ妓
王の白王后と假の頭を低く衣帯の虱を脱捨て居ころ行者よき間と
と又三根の毫毛を枝とりまんとて二箇の金鈴とて豹の皮の袂を
まを此二枚も遠ざかせまの金鈴の我袖裡に匿し置虱も亦及りし
虱毛を取て身ゆ返せを数千の虱忽ち失て残は拾ひ捨つる如く大王

衣帯を着くけとを春嬌質的の金鈴を大王小捧ぐ女王是と把れ
 又腰小帯我皇后と俱め味人更と思へども那刺針あささるるま
 怖る我西宮小帰つて心安く睡るべしと自皇后小別して西宮小
 々々彼春嬌が面小放ちつる瞌睡虫を身小返して自皇后小定貝を
 一更を語ら頼て本國小飯く奉んと云置て陰身の法と行ひ解道
 の法を以て門々を開きてまへ出門外小立て高声小呼つて曰く實
 歳早く金聖王皇后を返せと叫ぶ小妖的是を聞て驚き春を明く
 残を聞きつる慌得て門を堅く閉く宮中小入て斯と報は宮女是
 を通さしども妖王酒小酔て目首を左右する間小天曉小到る行
 者門外小在て口小官罵つて終小鉄棒を制して洞門を打破り入ると妖
 王以物音小睡を覚へ門外小跳り出行者と見て大の小怒り付那脚

のどを愛小まう我門を破りつるど行者罵て曰く你降妖怪眼大
 いつらと雖も我を認得む我の是聖天大聖孫悟空より金聖王皇后
 を把返ん為愛小まうて你を亡滅する妖王同く罵て曰く你の在僧
 小従ひて西天小行徑を求ると聞つる小信心生今朱紫國の奴とる
 妻小まうて死を求るや行者大の小怒り説話不知の降怪的今朱
 紫國の王家我をて父母神明のごとく尊む何ぞ辱ふるべきやと鉄
 棒を把て打て懸る妖王宜花斧を持て度々合五十餘合戦ひが妖
 王不當とや思ひらん勿心ち風頭の方小飛退呼つて曰く孫悟空
 待我今你と戦ひばく金鈴を揺て見まへ你逃るまを止て見物せよ
 行者曰く我の又金鈴を揺て見まへ你逃るまを止て見物せよ妖王
 曰く你が方小金鈴有や抑那国より傳へ受らば其謂は聞ん行

者曰く日你が金鈴の謂を問ん妖王曰く我以金鈴の大往行を八
 武炒中ゆつて太上老君の久く煉結乾金を以て作つたの金の鈴
 最無上の至宝なるを故あつて我小授け多ひつらり行者曰く我以金
 鈴も你が云處と同然とも你が金鈴の鳴るる我金鈴の雄る妖怪
 曰く是の仙家金丹の寶貝何ぞ雌雄の有べきぞ你日揺て見よ行
 者曰く你日先へ揺べ妖王嘲笑て頓て金鈴を取出し先第一の
 鈴を打揺けり小更小火出るまゝ妖王驚き又第二の鈴を打揺ふ
 煙を奪つて増々慌得て第三の鈴を振揺せども又更小黄沙起る
 更々妖王驚き怪に借り我此金鈴真の雌ゆつて雄小逢る怖
 して煙火を登せざるや怠麼せんぞと独言けりを行者喝々と打笑
 ひ然るを我金鈴を振て見まると二三箇の金鈴の拿出し二三箇一前

小打振るるを煙火一同小逆る此時行者呪詛を唱へて巽の方
 小向ひ一口の氣を吐つ忽然の旋風吹起り火勢盛ん小煙り消
 去黄沙满天小飛散て面を向べきや非は妖王怖と驚き迷ん
 とさる小道ろく狼狽騒いで苦と廻り既小命も危き處小只聽空
 中お吉有て孫悟空我未むりと呼る者あり行者頭を回して三三を
 見よ是則ち南海神陀峯教主觀世音菩薩の左りの御手小淨
 瓶を托着右の御手小揚柳を拿甘露滴漬て火の上小洒下ゆへに
 煙火跡ろく消去て黄沙ゆつち納りぬ行者の金鈴を取藏め空
 中お飛弁り合掌して菩薩を拜し當下那里へ往せぬや菩薩曰く
 我態々々笑ふ未て妖怪を降伏は他は是我跨的の金毛吼る他を
 守らる處の牧童耽睡し間小此畜生繩を咬断朱紫の国小到り

国王の災を拂んとは行者曰く彼妖精朱紫国王を憐れ白皇后を
狂惑し害を為すやと云くは何ぞ災を拂めし曰くや菩薩又曰く
仔細を知らず朱紫国王當時太子の時獵を好むく射すを
西天従来仙女孔雀大明王菩薩あり生る處の雌雄河個の孔
雀あり深き山坂下小遊び居るを太子一矢放て雄を射て癒付
雌の孔雀其矢を取て返り仙女孔雀明王へ許へり仙女則ち
是を聞て朱紫国の太子三年折鳳の災ひ災へ此罪を報くゆよ
と命あつて時節我彼執ふ棄て一遠小居合せ以詞を問居
此業畜又是を公小覺居て彼国の災火を払んとて終小好住
と成て白皇后を奪ひひとり二年洞の裡小隠し住今年の當今數滿
て你国王の災を除き我来て好邪を收め歸るなり行者問終りて

這様の故更々々他が命を助け候へん菩薩魔王を一喝しひ汝
業を田る不俱小還と何の時を待んとするや好怪地の上小倒轉ひ
く本相を現しとて菩薩菩薩北月上小打騎めひ女田生二箇の金銀
を奈何せしと行者聞て老孫是を奪ひ置候ひぬと菩薩小金銀
を返り奉る菩薩取て札の項小繫ぎ掛南海小回つとも小斯く行者
を錠棒を輪と緋身洞小打て入小好的を慶ふや宮中小至て金
聖王娘々小見え首尾を委く語つと今より本國へ帰し進せんといひ
るゆぞ白皇后小の惟喜喜拜謝する度尽むと行者頓て草を束て電
の形を作し是小白皇后を跨上りも娘々怖るく又るくも堅く眼を
塞ぎて宮庭間へへは我暫時の本國へ送り進めとてと神通
を以て後草竜空中を走しも白皇后の眼を塞ぎて唯耳小風の音

悟空
放草龍
金聖
送古御



會本百選巳三編



會本百選巳三編

を向のそふてまぐ二半時のうきうきふ勿心ち生紫赤国の宮中へ立飯の
行者雲を排きて殿上へ下つて皇后眼を刺死せんと呼ぶ此色
を刺て金聖兩眼を刺死見の人を思ひきや我本國の宮中へ下りけ
るを惟喜喜もふ度限るる國王見下り竜床を下り走りより死
久く逢さるる思想の情を迷んとて皇后の玉手を拿抱き倚んと
ひひらぐ猛然とて地上へ倒れ入り皇后の身へ刺針生るる我
手疼きて堪がず早く救へと呼びぬる行者まゝ依て助け起し謂
て曰く皇后女怪を捉らむひり上首一人の道士まり五色の仙衣
を贈り皇后小着をむ然るる其仙衣より刺針生て人の近く度
能は此故の二年の間終小身を沾りぬるむと人の國王是を問て
但惟喜喜且愁ひて此刺針を怎麼せんと思きぬる此時は
大聖有り我まじり刺針の衣愁るるを行者頭を回して目をま
見ろ小是真人張紫陽の雲を下りて宮中へ到り行者小向ひ禮
を施し小仙三年前仙會小舞き此國を過るる國王三年折鳳の
災あるまをきく時小妖怪皇后を捉去をる怖く妖怪の鳥小泊
まあるんまを傷を想ひて二件の古き襟衣を捨て五色の霞裳とほ皇后の衣
へて着しゆる彼刺針の襟衣は三年の間皇后の身を守りぬる物なり當今大聖功
を立て皇后を救ひて本國へ飯るまを得る此故の我まじりて那襟衣を脱ぐは皇后
右真人と見えて大恩を謝し禮拜は真人立倚て襟衣を脱ぐも自ら着し人々
小向ひ辞し別を中へ外へ帰りぬる國王及び白王も天へ小向ひて
禮拜し夫より大い酒筵を設け二藏師徒を接待する行者三藏小
告て嚮ふ預け置し戦書を出し國王小見し其外御多洞小

大聖有り我まじり刺針の衣愁るるを行者頭を回して目をま
見ろ小是真人張紫陽の雲を下りて宮中へ到り行者小向ひ禮
を施し小仙三年前仙會小舞き此國を過るる國王三年折鳳の
災あるまをきく時小妖怪皇后を捉去をる怖く妖怪の鳥小泊
まあるんまを傷を想ひて二件の古き襟衣を捨て五色の霞裳とほ皇后の衣
へて着しゆる彼刺針の襟衣は三年の間皇后の身を守りぬる物なり當今大聖功
を立て皇后を救ひて本國へ飯るまを得る此故の我まじりて那襟衣を脱ぐは皇后
右真人と見えて大恩を謝し禮拜は真人立倚て襟衣を脱ぐも自ら着し人々
小向ひ辞し別を中へ外へ帰りぬる國王及び白王も天へ小向ひて
禮拜し夫より大い酒筵を設け二藏師徒を接待する行者三藏小
告て嚮ふ預け置し戦書を出し國王小見し其外御多洞小

有^あく^まども^れ彼^は是^を落^ちめ^りて^は説^話々^々の^に国^土を^もめ^り衆^位の^官負^輩感^謝
謝^して^は拜^禮さ^るま^り又^も絶^望向^て王^の只^の官^に此^の国^を讓^んま^り又^も曰^はく^は
ども^も三^藏行^者固^く辞^して^は唯^だ西^方の^趣を^急ぐ^に王^の今^の役^奈何^に
関^文印^を寫^して^は三^藏の^通と^す師^徒四^人国^王の^辞語^を告^城門^を
を^出々^々の^に国^土を^首衆^位の^官負^輩遠^く送^りて^は別^れたり

盤絲洞七情迷本

濯垢泉八戒志形

斯^かて^は師^徒四^個の^朱紫^国を^離れ^て又^も少^の山^水を^経歴^す覺^す
秋^去冬^尽て^は又^も春^光の^明小^値或^時一^座の^邨莊^に望^む三^藏馬^を下^り
我^今此^人家^に往^て此^の齋^を要^めま^ん行^者笑^て曰^はく^は師^父齋^を要^め
も^も我^們代^りて^は行^く那^ぞ自^親師^父の^行の^趣を^急ぐ^に三^藏曰^く平^乎
日^の你^們那^邊の^遠き^に死^すも^も勞^を厭^むと^す齋^を急^ぐ今^日人^家

既^し小^進又^も天^氣清^明我^自ら^去て^は未^だと^遂小^鉢を取^て
歩^き行^直小^莊前^に至^り多^くの^叢小^一座^の石^橋あり^寂々^寥々^と
と^雞太^色も^ろく^一個^の茅^屋の^上と^四個^の美^女窓^の下^に在^り
て^は鴛^鴦を^猫き^鳳を^繡ま^り又^も庭^上の^二個^の女^子毬^を踢^き遊^び居^る
る^に三^藏便^ち橋^上に^立て^は貧^僧の^東土^大唐^{より}西^天に^至り^淫を^要
る^の僧^ら今^檀府^に来^りて^は齋^をと^り奉^ずる^方望^に此^の齋^を惠^む
る^に彼^の女^子等^は是^を聞^き大^に小^懼喜^一齋^の門^を出^まり^長老^疾此^方
方^へ上^前の^人と^三藏^の手^を扯^腰を^推て^は茅^屋の^一邊^を一^個の^石
洞^の裡^に押^入る^に三^藏驚^き借^り他^の我^を害^せんと^為る^に
と^身を^轉じて^は逃^出んと^す彼^の女^子們^都て^は武^藝の^三藏^を扯^倒
し^繩を^以て^洞中^に串^上個^々衣^服を^脱肚^を露^しる^に勿^ち臆^す

ある 孔中より 蛋の粗細 たる白き糸を 扯出し 玉を 赤く 銀を 散らさる
とく 須臾の間 小莊門を 一遍 小單ひ たり 三個の 徒 牙の 路の 一遍 小
駁を 見て 二個 大きき 驚愕 死 是 管 師 父の 女 莊 小 逢 ぬ け ぎ ん
早く 行て 救ふ べし と 駈 出ん と 為 たり 行者 兩個 を 住め 你們 駈
ぐ ぎ 又 あり 我 去て 見て 来んと 直 小 村 莊 小 ま たり 行 彼 白 光 を 見
る 小 白 糸 を 経 緯 小 引 ぞ え 千 万 層 の 厚 さ あり 手 を 以て 是 を 押
を 却て 和 け ぬ 粘 あり 行者 甚 度 の 物 たる を 知 ば 頓て 咒 語 を
唱て 此 地 の 土 地 神 を 呼 出 此 処 何 と 駈 する 地 方 也 此 白 糸 の 意
麼 なる 物 ぞ と 尋 ね 土 地 神 答て 曰 此 前 邊 なる 山 を 盤 糸 嶺 と
号 け 嶺 下 小 一 箇 の 盤 糸 洞 あり 洞 中 小 七 個 の 女 性 住 せり 他 寺

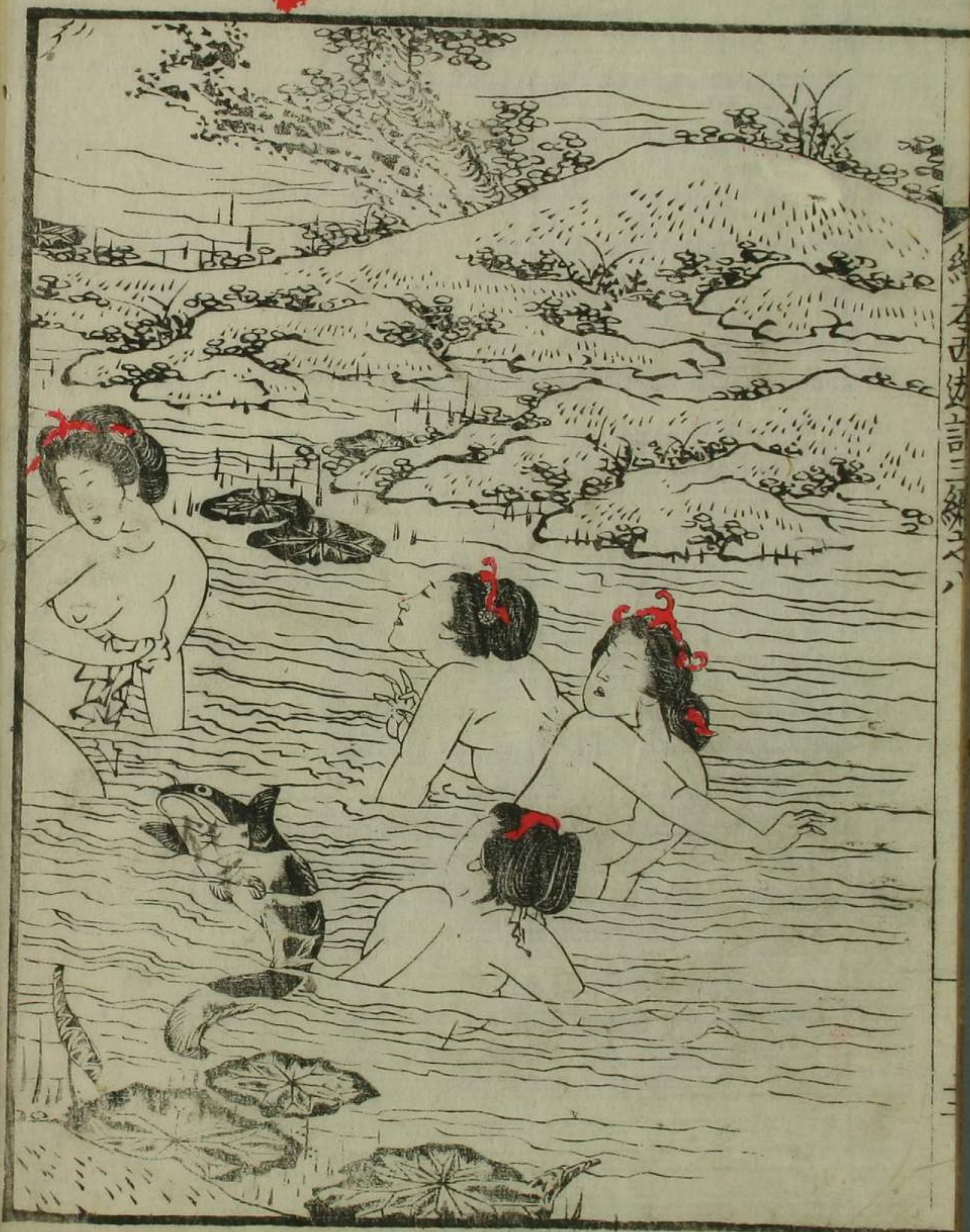
俱 小 蜘蛛 の 精 小 白 糸 則 ち 蛛 の 糸 たり 又 此 南 三 里 小 一 座 の 濯
垢 泉 あり 此 泉 天 生 の 熱 水 也 他 寺 毎 日 二 遭 づ 那 里 小 行
洗濯 する たり 今日 頓て 出 来ん 持 持 見 見 宙 々 行 者 見 を 向
先 土 地 神 を 放 ち 返 一 個 の 蒼 蠅 兒 と 言 ば 草 頭 小 住 して 待 たり
死 不 及 時 白 糸 盡 く 消 失 して 原 の 村 莊 を 露 莊 門 の 裡 に入り
七 個 の 女 子 歩 出 たり 行 者 則 ち 翅 を 延 て 斬 する 女 の 頭 小 住 して
他 寺 小 徒 行 行 たる 處 小 果 然 南 三 里 計 行 行 一 座 の 牆 門 あり 十
分 壯 麗 なる 一 個 の 女 子 扇 門 を 推 排 け 中 小 一 塘 の 熱 泉 あり 五
丈 小 一 丈 餘 り の 廣 さ 小 深 さ 一 尺 二 四 尺 小 過 ば 水 の 珠 たり 小 信
う たり 他 の 汀 小 一 箇 の 漆 塗 の 衣 架 を 構 へ たり 行 者 又 翅 を 延 て
衣 架 の 上 小 住 して 伺 ひ たり 小 彼 女 子 皆 一 扇 小 衣 帶 を 脱 我

們早く洗濯し家小飯をして彼和尚を煮て喰いと個々雪の女
肌を露し浴地小入て火ひさくらた水を躍せ彼を翻して戯せたり
行者是を見て思やう今他寺を打殺さん何より安く然らば常
言や男不與女闘と云は却て我名を失ふべし且二箇の謀計を
以て他寺を動かさるや小まをべしと忽ち一翅の老鷹と志友衣
架の上小掛る七個の衣帯を盡く抵と取嶺上小飛去く原の
路傍小立帰ると本相を現く八戒沙僧小此支を説話々を八
戒是を聞て師兄妖怪と知バ何ぞ是を打殺さる是草を斬て根
と除くの謂る我今行て打殺し来んとく釘釘を取て出行
る沙僧行者小謂て曰く今師兄の曰ふ如くならざ師父ハ極めて
彼邱莊の裡小居るあて我行て伴ひ飯んとて頓て彼石橋の邊小

ま行茅屋の裡小入て見を妖怪一個も在は一邊の石洞の裡を覗き
見を友小二藏の細縛らして御座る悟浄走り入て縛めを解下
て急ぎ行者が待居る路傍へ飯をくれ行者惟喜三藏小向ひ此後
齋を求めり我門小任せ置る人と云を三藏打點頭我他今餓死する
とも此後自ら齋を要べうとて悔たり却説七個の女子ハ衣服と
鷹小取しと出る支能む水中小躡り個々鷹を罵り居る此時八戒
門を排りて入来り是を見て打笑ひ女菩薩我をも同く洗濯させ給
るべしと直撥を脱捨て捨的水中へ飛入る女妖怪の太い小奴や此
尚十分無礼らうり出家人の身とて女人と同く洗濯せんとするや
小取困んで打んと為と八戒原水煉の連者をも水中へ飛入る女
ど二箇の鮎魚と做女子小が肌を探すと狂ひ廻る女妖怪太い小

昔八百五十七三篇

八坂池中
變鮎魚
騷女怪



困り呆西へ追とも捉當は東へ捜とも手を滑り那方此處と乱轉
 女姑們都て心倦精勞して詮方を知は八戒又水中より跳つと出す相
 を現し直袂を着し釘鉈を揚て罵て曰く你亦我を點魚と田心ふや
 我は東土大唐より西天小至つと徑を要る長老の徒等猪八戒とて
 我より你们我師父を捉へ蒸吃んとて大胆なる女姪ども性命を免
 難し我釘鉈を受よとて走つと倚て築んとてまゝの女怪ホ大い狼狽
 水中小跪下八戒を拜し我眼有て珠る你的師父を捉て家小置
 今より師父の性命を助て此の盤費を送りて西天へ去り進せん
 万望我们命を助め八戒曰く糖を掌らして君子を欺く常言あり
 我那ぞ其甜口を信むべらんや早く頭をのべて我釘鉈を吃とく只管上
 前で築かふる女怪ホ慌得て耻を覆ふ小暇申は膝下小手を侮着

跳出個々臍より彼糸を操出四方八面より絲をうけ勿ち八戒と當
 中み單ひ住めり八戒の浮雲の中み圍とる如く脚を拳ふと頭
 き倒と赤出とまを頭支へ右小轉ひ左小倒と眼昏と唯地小臥て
 呻吟居り女怪們的八戒を單ひ住め個々赤裸めて村莊小臥る落
 衣を出して身小纏ひ石洞の裡を見を唐僧在は諸の這廝逃去り
 我們誤て唐僧を捉へ却て此耻を蒙りり先師兄の許り行て量
 るさんと七個の女姑一奇小西を指てぞ出行る少時ありて八戒頭を
 撞げ見を纏る絲此て破とる衛々目とる這出て二個の待居
 處へ駈歸り利害々々我今女姑寺が絲小單ひめて危く命を助
 くりとて頻て又村莊小至り一把の火を放て石洞茅屋を焼尺く
 師徒四個立出て西小向ひて急ぎ行ぬ

情因舊恨生災毒

心主遺塵幸破光

原来此盤糸山嶺の西六七里大路の二邊一座の黄芒觀あり觀中の道士の則ち彼七個の女怪と同学の兄弟ありて常小件来をさくたる故此日女怪亦直小觀中ふまり道士小見えて唐僧を捉て耻を蒙りてる正を語り種々高議して居處小三藏の是を知ら西小向ひく路を急ぎ不交時觀門の前小至り我門少時此觀中小休只便豆を見て斎を要べと後茅ホと俱小門を入る道士出迎老師父の何処より来りぬると向三藏手を拱て答て曰貧僧の東土大唐より西天小至り仏を拜せんと為の僧なり當今仙宮を過る小依て少時休足を為んとは道士是を聞て大り小惟び借の閑及びる東土の聖僧小おろし候や小道大り小牛敬をさくつとて四衆を正堂小請り裡小入

童子小五鐘の茶をさるるせ道士手親三藏小献り行者の師父の後小座し形の小さきを見て是を二徒才とや思ひけん先八戒小茶を献り次小悟淨次小行者小進め自親一鐘を取て相陪を行者の御向より道士が唐僧と閑より大ふ喜ひ兼て準備する如く急速小茶を進め又四鐘の茶の都て赤束を入道士が茶の却て黒束を入るを見ても心中怪と茶鐘を手に小拿少時伺ひ居る間小三藏八戒沙僧は何の由もく都て茶を吃畢つとらぐ勿心ち二個一斎小呵呀と叫びり倒れたり行者驚馬き怒り罵て曰く此畜生我と你と原来何の死心もろぞ心度毒菓を拵て我師父を害しつるやと茶鐘を啗的と投中り道士袖を拵て架住め大り小怒りて曰く你淫猴自ら禍を招き却て死すると云や你们僧小盤糸洞小入て斎を乞懼垢泉小て洗濯

を為さば行者曰く汝既小盤絲洞濯垢泉の仔細をまるとる借い彼七
 個の女怪の都て你が老婆をうぐべし且我一棒を試看すと耳の中より
 金杵棒を把出せを道士の急小身と同じ口の宝剑を取正堂の在
 て戦ひたり時小忽ち廟の方より七個の女怪一齋小出来の個々懐
 裡を引開き胸の孔中より糸を作出し行者を單ひ住んとて行者御
 小八戒が説話を聞くとを糸を拭らしての不當と身を轉して空中
 小飛升と霎時息を休むる間小忽ち彼觀門殿閣も技を穿た如
 く鋪單ひ看一片の銀世界と寢たり行者是を見て心小驚驚さ利
 害利害我幸小早く脱と出たり尙一度是小單とるを怎生とて身
 を動まべらんやと霎時沈吟しうろろが頓て又一固の計策を思ひ着
 七十根の毫毛を技七十個の小行者と寢させ金杵棒を宣ふて

七十條の又見棒とて一個の小行者毎小又見一條づく持せ彼鋪單
 ひるる糸の廻りよう掻攪させるとを遂小裡より七個の蜘蛛を引出
 しうろ小彼蜘蛛個々二尺余のたのきめて俱小手脚を縮めて一團と
 する命を助めると叫びたり行者遂小小行者を身小返り收め又
 兎棒を集めて鉄棒とて彼蜘蛛を件一小打殺に彼道士又劍を揚
 げ跳りまゝの行者小向ひて戦ふ五合道士漸々小力劣して吐て身
 を退くと見たりうろろが勿心ち衣服を解捨て両手を上の指拳けり兩
 邊小一千隻の眼あて淫刺と一舌叫ぶと等く眼中より金光迸放出
 て十分利害行者此金光黃霧の中小單ひ籠と大小数馬ききり脱
 出んとてとて脚を動ま地ぬく上小向ひて飛出んとてとて却て
 金光小打落さし左小廻り右小轉り行を流ると働けども鉄桶の裡

小右が如く脱るべきやうも無さうが又勿心ち一箇の計策を思ひ善
一般身を揺く言て穴穿山甲と做土の中小鑽り入地下に在て二十
余里を鑽りて衝々小く頭を出し見れば彼金光十余里の裡を單
ひ此處の光も無さう遂に地上に立出本相の現く事ども遙々の
地下を潜りて精心を勞う再度戦ふべきと氣力もろく斯てい志慮
して師父兄弟を救ひ得んやと泪を流して立ちたる處に向邊の
方より一個の婦女身小重孝を穿手に一盃の飯を持泪を流
して走つて来りたゞ行者を見れば又我と同じ悲む人あり
彼婦人の誰為小大やらんと上前侍て向て曰く女菩薩何個を失
ひて這様小哭のやと人々を彼婦人涙と押して曰く我夫黄花觀
の道士と争ひ毒菓を以て殺さる我此一飯を墓小備へて此正史

婦の情も露さんと泣行者を見れば又我と同じ悲む人あり
夫の爲小一飯を備へて祭りのや我師父も又彼道士が妻小害せり
此のやども我是を祭るべきやうやく公の疼を堪がごとく婦人が曰
く長老の那国より来りつる人ぞと問行者則ち東土より来り
觀中よ彼道士と戦ひて其其身金光小單圍らんと爲くを幾
小身一個遁りつるとして万般落れぬと語々を婦人聞終りて云
借の長老彼道士と知られど他が名の百眼魔君とも入りま目怪
と云ふるの他を降さんと田心みゆの那里小一位の聖賢あり此聖
賢管はよく金光を破り道士を降伏しぬべし行者全心を再拜して
女菩薩万望の其聖賢を教め婦人が曰く此南千餘里の紫雲
山とりの山右其山中千花洞小一位の聖賢昆藍婆娑菩薩といふる



ぎやうどや 呪とらふ
行者巖頭
まじよりの
七十個
せうぎやうどや
放小行者
まじり

了見を請まるといひて那道士を降伏せん支疑ひる。仔細小説教
我を支めて別れ候はんと思ふと云うと思へた忽ち空中に飛上り
と現れ我竜花會上より你が師父を救ん為と云ふまじき
小至るとも我教に支と告るまじきと云ふと西と云ふて飛上り
空中を礼拜し勿心ち勅斗雲を放ちて打跨紫雲山へと飛行し
千花洞小至るといひて更小難大志もろく静々情々洞中小一個の
老婦榻上座に居り行者曰を彼昆藍彼女菩薩と云ふと思ひ進
ひて拜し々々を菩薩撮と下つて曰く汝の孫大聖王の左ぎや今何幹
つて来たつと云ふぞ行者曰く菩薩息慮して我を認得りや菩薩曰く
你前年天宮を鬧せし時普天普地都て皆名を傳へ誰か你を知さ
行者曰く老孫今の仙門小皈依唐僧を守護して西天小至る路の

て今日黄花觀の妖怪小出遇難小逢ぬ方望の菩薩彼妖怪を降し師
父を救ひ給りてと云ふ菩薩曰く我魚藍會日小赴きしより以ま
小三百餘年姓を隠し名を埋まざりて門を出ば今日誰か你を我
隱室を教つや行者曰く老孫原一個の地理鬼曾て他の教を受
自ら知て参りて菩薩曰く我本外小出と思へど你己小汪を求
るの善言又あれは是を助でや有へんは我今你と假小去つて頻
雲小駕て打扱るくを行者後小從ひて不夕時黄花觀小至り金光
觀々ころを臨之行者指差して曰く彼金光の則ち妖怪精なり菩薩は今何
の益を以て他を降しや菩薩曰く我子昂日星官が煉ころの
處の綾巻針あり是を以て降さべくと衣領の裡より眉毛の粗細つる五
六分の長短つる綾巻針を取り出さし空小向ひて投上るく一色の御音も

